

人間疎外論の遺産

三沢 謙一

MISAWA Kenichi

それでは、「人間疎外論の遺産」という標題を付けた「社会人間学」の最終講義を行います。これは本学において私が行う最後の講義でもあります。皆さんのお手元に講義内容の主な項目を記したレジメをお配りしてありますので、それに沿ってお話ししたいと思います。

1 社会人間学の半世紀

1) 社会人間学への関心

まず、これまでの学問生活を省みる回顧談から始めますと、私は20代の学生時代に「社会人間学」という学問分野に関心をもち、それから70歳の今日までこの学問分野の勉強・研究・教育に従事してきました。「社会人間学」とは、一言でいえば、「個人と社会」の関係を問う学問であり、「人間の社会的形成」「生活経験と社会システム」「社会変動と人間」等のテーマを扱う社会学の一分野ですが、私は半世紀近くもこの学問分野とお付き合いを続けてきたわけであります。

この学問分野に私が最初に関心をもったのは、大学の2回生のときです。私が在学していた東京大学の教養学部は、2回生から3回生へ進学するときに学部学科を選択するシステムになっており、当時の私は文学部の哲学科もしくは倫理学科へ進学しようか、それとも社会学科にしようか迷っていましたが、私の選択を最終的に左右したのは、今にして思えば、当時愛読していた清水幾太郎という著名な評論家・社会学者の著作でした。

私が大学生になった1955年頃は、マルクス主義が社会変革の最有力の思想として強い影響力を

保持していたのと並んで、アメリカン・サイエンスとしての社会学が新しい社会認識を約束する学問として注目を集めつつありました。新しい社会学の息吹を伝える若い気鋭の研究者の仕事が次第に増えはじめていましたが、そういう新しい社会学動向の先頭を切り、いわばその旗手役を務めていたのが、当時、評論家としてだけでなく社会学者としても大活躍していた清水幾太郎氏でした。

清水先生は、戦前・戦中に出版した『社会と個人』『社会的人間論』、戦後の『社会学講義』『社会心理学』『私の社会観』などの著作で、個人を超える実体としての社会の優位をもっぱら強調する学説も、社会契約説に代表されるような個人主義に傾斜した学説もともに斥け、一貫して「個人と社会」の関係を動的な相互関係としてとらえようとしていました。『社会的人間論』では、「一個の平凡な人間」が、家族集団に生まれてから遊戯集団・学校集団・職業集団を遍歴する中で何を経験し、どのように行動するのか、そこにおいて彼が「社会によって作られる事情と、逆にまた彼が社会を作ってゆく働き」とを描いています。それは、アメリカ社会心理学の成果を踏まえたものではありますが、しかし単なるアカデミックな新しい学説の紹介ではなく、清水先生独自の発想法によって日本の現実へと引きつけて解釈され、清水流の独特の説得力ある文体で記述されたものです。

伝統的哲学の影響力の強かった信州の知的風土で育って上京した早熟の哲学青年にとっては、清水先生の書物ははなはだ斬新で、魅力あるものに

映りました。その魅力による吸引力がおそらく最も大きな要因となって、私は文学部社会学科への進学を選択し、そしてそれ以後も、ずっとこの学問分野に対する関心を深め、「はまって」いくこととなります。

なお、清水先生が「社会的人間論」と名付けたこの学問分野は、日本社会学のその後の展開過程においては、「人間形成の社会学」「(社会学的)社会心理学」「人間主義的社会学」「ミクロ・ソシオロジー」「人間社会学」など、さまざまな名称で呼ばれるようになっておりますが、私としては、清水先生の書物に惹かれてこの学問分野を選んだ初心を忘れないようにしたいという「こだわり」から、あえて「社会人間学」という名称を使っていることをお断りしておきます。

2) 人間疎外論の研究

社会学科に進学して、先生方の講義や同級生らとの読書会などを通じて社会学関係の勉強を重ねるうちに、私は、いつしか、本日の最終講義のタイトルにもなっている「人間疎外論」という社会人間学の一つのアプローチに関心をもち、疎外論関係の文献を集中的に勉強するようになります。そして人間疎外論をテーマにして卒業論文を書き、修士論文でも人間疎外論を取りあげ、更に、修士論文を出発点として、その後の研究活動を展開することになります。

人間疎外論とは、無理を承知でごく短く説明すれば、近代人の生活システムを一定の価値関係的な視点から解明することを課題とするアプローチです。生活世界の構造的・機能的諸側面が近代人の歪んだ生の営みをどのように形づくっているのか、それは担い手の心理・意識構造の歪みにどのような影響を及ぼし、更に、基底的な形成要因としての近代社会全体の構造・変動とどのように関連しているのか、などの問題を理論的に解明する

ことを目指すアプローチといえます。

疎外概念の形成過程をたどれば、ヘーゲルやフォイエルバッハや初期マルクスなど、19世紀のドイツ哲学にまでさかのぼることができます。日本語の疎外という用語は、ドイツ語の *Entfremdung* の訳語ですが、この概念は、まずヘーゲル弁証法において独特の哲学的意味を与えられ、次いでフォイエルバッハの現実的人間学において唯物論的な具体性を付与され、更に初期のマルクスによって社会理論の基礎概念へとつくりかえられました。

こうして人間疎外論は、19世紀前半に初期マルクスの社会理論の中に姿を現しますが、しかし、その後は、いったん知的世界から姿を消してしまいます。すでに後期のマルクス自身の著作であまり見かけなくなり、20世紀の20~30年代にごく少数の西欧の知識人に注目された他は、長い間忘れ去られてきました。ところが、第2次大戦後に人間疎外論の意義や重要性が再発見もしくは再認識され、ヨーロッパや(少し遅れて)日本の知的世界で、疎外概念がにわかに注目されるようになります。

私が疎外論に関心を持ったのは、この日本の知的世界における疎外概念への注目が始まって間もない頃でした。当時は、社会思想史や社会哲学の分野におけるマルクスの疎外概念の解釈や、社会学の分野における伝統的な社会学理論による疎外概念の置き換えの試みが現れ出したときで、マルクス主義社会学(=史的唯物論)は存在しても、「マルクスの社会学」はまだ存在していないような時代でした。そんな時代に、私は、マルクス疎外論と伝統的 sociology の双方の問題提起と方法原理を生かしながら疎外の認識をいっそう深化させる、そのような社会学理論の新たな展開方向を探ることを研究テーマに選んだのです。しかし、若気の至りとはいえ、これは、駆け出しの若造が取

り組むには難しすぎる、原理的な大問題です。もともと遅筆であるのに加えて、前人未踏に近い問題領域でしたから、なかなか論文が書けなくて、悪戦苦闘したことを憶えています。

いってみれば、初心者が山へ登るとき、幾つもある登山道の中から、わざわざ上級者向けの最もけわしく、むずかしい直進ルートを選んでしまったようなものなのですが、しかし、当時の私は、今よりずっと元気でしたから、そんなことはお構いなしに、40代の前半ぐらいまで、このテーマを追っていました。

3) その後の研究

ところが、私が40代の後半に差しかかる頃、時代でいえば、高度経済成長が終わり、その後の不況を乗り越えて安定成長期へ移行した1970年代末頃から、私の研究活動に転機が訪れます。その転機とは、社会人間学自体の研究動向の変化もたらしたものです。

まず、社会学理論の分野でグランドセオリーの影が薄くなるのと歩調を合わせるようにして、社会人間学の分野においても、人間疎外のような天下国家の大問題の研究は流行らなくなります。少し前には、人間疎外という言葉が新聞や雑誌の見出しを飾り、流行語になるほど広く使われていたのですが、そんな時代がウソのように、日常世界はもとより学問の世界でも、この言葉を見かける機会がぐっと減ってしまいました。そして、社会学理論の分野では、グランドセオリーに代わって、中範囲やミクロレベルの理論構築が盛んになります。その動向と連動して、社会人間学の分野においても、組織への適応、自己の提示、人生の生き方といった体制内的なトリアヴィアルな問題の研究や、そのための概念装置・アプローチの開発が盛んになってきます

こうした研究動向の変化に直面した場合、昔と

違って現在の日本の大学、特に私学では、自分の担当する専門分野の最近の研究動向における変化を全く度外視して、注目されなくなった古いテーマだけを追い続けるということは、たとえ、そのテーマが未だ追い続けるに値するものであっても、実際問題として非常にむずかしくなっています。そこで、40代の後半からは、人間疎外論だけでなく、最近の研究動向から検討に値すると考えるテーマを選び、ささやかながら、それらの研究にも取り組むようになりました。「アメリカ社会学におけるパラダイム革新」「役割理論」「社会化研究」「ライフコース研究」などの基礎理論をめぐる取り組みがそれです。

とはいっても、現実の人間疎外は依然として存続しているわけですから、人間疎外論への関心が全く無くなってしまいうことはなく、この間も、疎外論に関連した取り組みとして、私生活化（privatization）の観点から豊かな社会における生き方をとらえる試みや、「地方都市の過疎問題」「大都市郊外の共生型まちづくり」など、地域生活における共生問題を検討する試みを、ささやかながら続けてきてはいます。但し、何分これらに振り向けられる時間が足りないので、開店休業とはいわないまでも、休日のみ営業に近い、不十分な取り組みしかできていないことは確かです。

以上が、私の研究の歩みの概要です。今から思うと、前半は、ある種の使命感のようなものに突き動かされて、研究に打ち込んできたような気がしますが、後半の方は、だんだん忙しくなる中で、大学における一つの専門分野の研究教育を担うという役割を、何とか果たしてきたという感じ。前半に攻めの姿勢が強かったとすれば、後半は守りの姿勢に徹していたといえるのかもしれませんが。

というような次第で、はからずも研究者として

の生活を定年退職の日まで無事に続けてきてしまったわけですが、実は、退職までに研究成果をまとめて出してはどうかという話がありまして、少し前からその準備にとりかかっていたのですが、なんとかその仕事を終えたかったのですが、しかし、計画通りに進まなくて、退職までにはとても間に合いそうにないということになってしまいました。けれども、だから、この間の準備作業が無駄になったということではなく、「思いがけない発見」もありました。

このまとめ作業のために、私は、最近の人間疎外論関係の主な文献に改めて目を通してみたのですが、その結果、最近の研究には、従来の人間疎外論とは違う概念やアプローチを使っているものの、実質的には人間疎外状況の優れた分析に他ならないといった業績が増えている、という「思いがけない発見」をしたのです。つまり、過去の人間疎外論の遺産は、そういう形で、次の世代の研究者に継承されているのだということに気づいたわけです。そこで、以下では、そのような最新の社会学の業績の一つを取りあげ、それについての紹介とコメントを通じて、人間疎外論の現状と課題についてお話するということにしたいと思います。

2 希望格差社会

1) 最新の業績に注目

ここで取りあげる現代社会学の最近の業績とは、『希望格差社会』（2004、筑摩書房）という書物です。昨年11月に出版されてから、わずかの間に、一般の読者からも社会学とその周辺の専門家からも、広く注目され、高い評価を得ているものです。著者は東京学芸大学教授の山田昌弘氏。40代後半の社会学者で、数年前に『パラサイト・シングルの時代』という書物で一躍有名になりました。山田昌弘氏の専攻は、日本社会学会の名

簿に載っている氏の自己申告によれば、「家族社会学」「一般理論」「性・世代」の3つです。

『希望格差社会』は、現代日本の職業・家族・教育などの生活領域に生じた最近の変化に着目し、「生活の不安定化」の進行という最近の傾向が生活諸領域に急速に広がっている状況と、その社会経済的背景や社会心理的帰結を分析・考察した一種の現代日本社会論です。しかし、単なる実証的・客観的な分析・記述に終始する研究ではなく、生活の不安定化の急増による危機的状況の到来を憂い、若者たちの間に広がっている「希望の喪失」の絶望的状況に警鐘を鳴らす時代診断・時代批判の書でもあります。

本書は、じつは人間疎外状況の解明を課題として掲げているものではありませんので、その限りでは、人間疎外論とはいえないということになりますが、しかし、その実質に注目すれば、現代日本社会の人間疎外状況の一定の側面の分析・解明に成功していると評価できる内容を備えており、その意味では、人間疎外状況を分析した優れた業績の一つと見なすことができるものです。そこで、本書を材料にして、人間疎外の分析・研究はどこまで進んでいるのか、人間疎外論にとって残された課題は何かといった問題を考えてみたいと思ったわけです。

まず、まだ本書を読んでないひとのために、論旨の要点を紹介しておきます。

2) リスク化と両極化

本書は、各種の統計データや著者が関わってきた調査の経験などから、21世紀を迎えた日本社会は生活の各領域の不安定さが急速に増して危機的状況にあるのではないかという診断を下し、この診断を検証するために、「リスク化」と「二極化」という2つのキーワードを用意し、この2側面に焦点を置いて「生活の不安定化」の急増状況

を分析しています。

「リスク化」とは、いままで安全、安心とされていた日常生活の予測可能性が徐々に低くなり、リスクを伴った不安定で不確実なものになる傾向のことです。ウルリッヒ・ベックの「リスク社会論」にヒントを得て名付けられたこの傾向がみられるのは、職業生活についていえば、男性で大学を出て大企業に勤めれば、昔なら終身雇用を望むことができたのに、いまでは倒産や解雇と無縁ではいられないという状況であり、家族関係では、結婚したくてもできない人が増え、結婚したからといって一生続くとは限らないし、年金財政の破綻の恐れから、老後にゆとりのある人生が送れるかどうかの不安もふくらんでいるといった状況です。

もう一つの「二極化」は、戦後に縮小へと向かってきたさまざまな格差が、再び拡大へ向かう傾向を指しています。戦後の日本社会は、高度経済成長期以降、「中流社会」といわれるように、大きな格差を感じることなく生活することができたのですが、1990年代中頃から、多くの論者によって、中流社会の崩壊、格差の再拡大化を指摘されるようになります。それを端的に表すのが「勝ち組、負け組」というコトバで、バブル崩壊後の企業倒産を指すのに使われたこのコトバは、いまでは生活のあらゆる領域に当てはめられるようになっていきます。

本書は、このような「リスク化」「二極化」の急速な進行が、職業、家族、教育などの各領域における生活状況をいかに不安定なものにしているか、更に、それらの生活状況の不安定化が、社会意識の不安定化、とりわけ若者たちの「希望の喪失」状況をどのように生み出しているか、を詳しく分析しています。そして、その分析を踏まえて、日本社会の近未来予想図をかなりペシミスティックに描いています。取りあげたい部分の多い

面白い書物ですが、全てを紹介する時間的余裕がないので、ここでは、人間疎外の分析と密接に関係する「職業生活の不安定化」と「希望の格差」の拡大を分析している2つの章だけを見ておくことにします。

3) 職業の不安定化

(1) 若者の不安定労働の増加

「職業の不安定化」の章でまず取りあげているのは、フリーターの増加、学卒者の就職難の深まり、高校卒業生の就職状況の悪化、更に、若年失業者や派遣社員の増大などにみられる若者の職業の不安定化現象です。

フリーター（定職につかないままアルバイトを転々とする若者）については、1997年時点の167万人（労働白書）、もしくは173万人（日本労働研究機構）が2001年時点では200万人余に増え、この人数に正社員を希望する失業者や「登録型派遣社員」などを加えた不安定労働者の総数も、やはり年々増え続けて、2001年には417万人に達し、更に、隠れ失業者ともいえる就職のための留年生、就職できなかったから進学した大学院生、一部の専門学校生なども加えた「収入基盤が不安定な若者」の総数は、ざっと計算して500万人以上にのぼると本書は推測しています。

こうした職業の不安定化は何をもたらすのか。安定した収入が得られない、まともな生活を送ることがむずかしいなどの経済的生活問題はもちろんですが、本書は、その他に、マックス・ウェーバーやハンナ・アーレントを援用して、職業が近代社会で持ちうる「アイデンティティ」付与の機能に注目しています。近代社会においては、仕事は「自分が社会の中で必要とされ、役立っている」というアイデンティティの感覚、「生き甲斐」の感覚を付与するという役割を与えられています。従って、現在、日本社会で生じている失業や

フリーターの増大は、単に経済的生活問題だけではなく、職を失った人や定職に就けない人々のアイデンティティを脅かす要因ともなっているのだというわけです。

(2) ニューエコノミーの到来

次に取りあげられているのは、若者の職業の不安定化現象はどのような原因から生じたのかという問題です。

この原因に関する著者の基本的な見解は、一時的な不況や若者の好みのせいではなく、アメリカを始め多くの先進国で共通に生じている産業システムの構造変動にその理由を求めなくてはならないということです。1990年ごろを境とするこの産業構造の転換、グローバル化とかIT化とか呼ばれるその転換の内実を、本書は、ダニエル・ベル、ピーター・ドラッカー、ロバート・ライシュらの所説を踏まえて、とりわけライシュのニューエコノミー論に依って、概略、次のように説明しています。

現代社会は、モノよりもサービスが優勢になり、消費者が求める多様な商品をより安く提供しなければならぬという圧力が加わり続けるため、商品をなるべく安く提供する競争がますます激化します。そしてグローバル化とIT化によって、高品質だが安価なモノが容易に選択、調達、購入できるようになるため、もの作りにかかる労働力のコストを下げる圧力が大きくなり、ここに、労働力の二極化現象が始まります。

1990年頃から顕著になる新しい産業形態は、雇用を二極化させ、企業は、ニューエコノミーの中で生き残るために、一方で、クリエイティブな能力、専門的知識をもった労働者を必要とすると同時に、他方で、マニュアル通りに働く単純労働者も必要とします。そして二極化する仕事に直面した企業は、雇用行動を変えざるを得ません。専門的・創造的労働者は、企業に必要な中核的労働

者として、自社で育て、一方、代わりが効く単純労働者、サポート労働者は、コストを下げるために、派遣社員、アルバイトに置き換えようとしします。

この事態は、中核的労働者と単純使い捨て労働者の間に大きな裂け目がつくれ、中核的・専門的労働者は、専門的能力を身につけ、保つべく早期から長期間訓練を積む必要があるため、単純使い捨て労働者が、昔のように、徐々に仕事能力をつけることによって、管理職や専門職に昇進していくことはもはやできなくなるということを物語っています。

以上のように、本書は、若者の不安定就労が増加している最大の原因を1990年代のニューエコノミーの進展に求め、そこでは、専門的・中核的労働者と単純労働者への二極化が進み、単純労働者部分が非正規雇用のアルバイト、派遣社員等に置き換えられつつあり、その影響が、若者たちに増幅した形で現れた姿がフリーターなのだ説明しています。

4) 希望の喪失

(1) 努力が報われない機会の増大

「希望の喪失」に関する章で取りあげられているのは、職業分野や家族・教育の分野における不安定化の状況が、若者の心理や意識にどのような影響を及ぼしているのかという問題です。まず、指摘されているのは、「努力が報われない機会」が増え、報われる見通しがたたくて希望が持たなくなり、それに伴って、「やる気のない若者」が増えてきたという点です。

バブル期直前までの日本社会は、ほとんどの人にとって希望に満ち溢れた社会であったが、1990年代後半から希望のない社会に変わってきた、と著者は指摘しています。まず、「リスク化」の進展によって、苦勞して学校に入っても、一流企業

に就職できるとは限らないし、仕事で努力しても、リストラされるリスクがあるし、家事・育児を頑張っても、離婚されたら、努力は無駄になってしまう。こういう社会変化は、能力のあるものの「やる気」を引き出すかもしれないが、能力がそこそこのものの「やる気」は削がれてしまいます。

そして、「二極化」傾向が、この状況に加わります。親や能力に恵まれたものは、努力が報われ、リスクが少ないパイプに入り込むことができるし、企業の中核的正社員に採用されたものは、その努力を認めてもらいやすいけれども、親に恵まれないものは、努力してもパイプラインから漏れやすいし、フリーターは単純労働で頑張っても中核的正社員には無理なのです。

こうして、高度成長期の「希望」は、誰でも持つことができたが、しかし、現代社会では、希望は、誰でも簡単に持てるものではなくっており、希望をもてる人ともてない人、その格差が歴然と開いている、と著者は強調しています。

では、このように希望がなくなり、努力が報われる見通しを人々がもてなくなったのは、いつ頃からのことなのか。著者は、1998年からであると判断しています。原田泰、玄田有史らの経済学者の見解を踏まえ、更に、自殺者数の増加、フリーターの増加、離婚、できちゃった婚、児童虐待、不登校の増加傾向などのデータの検討を踏まえて、1998年が経済社会構造の「質的」転換の始まる年であると解釈しています。

(2) 希望なき人の絶望と逃避

どんな時代にも苦労はなくならないが、しかし、耐える力が備わっていれば、つらいことに出会っても、乗り越えることができます。しかし、現代社会のように、耐える力が減退すれば、反発、絶望、逃避などが生じ、さまざまな問題行動が起こることになります。

この耐える力の減退をひきおこした現代社会の主な要因として、著者は2つの点を挙げています。その1つは、「努力が報われる見通し」を人びとがもてなくなったという点、つまり「希望の消滅」です。報われる見通しがないまま苦労を強いられると、あるものは反発し、あるものは絶望し、またあるものは報われない苦労を強いられる状況から逃れようとして、さまざまな問題行動が発生します。

まず、アディクションの増加です。アディクションとは、これさえやっていれば現実の苦労を一時的に忘れることができるという活動に「はまる」傾向で、たばこ、酒、買い物、セックスなどの軽い形態から、パチンコ、ゲームセンター、ファミコンなど、更に、オタク、追っかけ、ドラッグなどがそれです。これらの活動への依存が進むと、アディクションが自己目的化して、アルコール中毒、ドラッグ中毒や性風俗産業・買春の増加など、日常生活を破壊するケースに行き着くようになります。アディクションを続けるには、お金がかかるので、収入を得ることが難しくなると、援交などの社会的に望ましくない手段で稼いだり、家族、親戚、消費者金融でお金を借り倒したり、万引きなど犯罪的手段でお金を手に入れるなど、問題行動が増えることになります。

また、新々宗教など「将来の幸福を約束する」ものにすぎる人も現れ、「努力が報われない」のは前世の報いや信心が足りないからだ、高額なものを買わされたり、怪しげな教団活動にはまる人も多くなります。更に、将来に絶望した人が陥る自暴自棄型の犯罪、金品要求や物取り、怨恨などの「必要に迫られての犯罪」ではなく、自分の利益にならない「犯罪を犯すためだけの犯罪」も増えています。また、これらの「反社会的行動」だけでなく、「非社会的行動」と呼べる現実からの撤退行動もあります。その最たるものは、1998

年に急増した自殺ですが、その他、不登校やひきこもりが、やはり1990年代後半から増え、100万人とも200万人ともいわれる「社会的ひきこもり」は、年々増加し、更に、長期化・高齢化しています。

(3) 苦勞免疫の衰退

苦勞に耐える力の減退をひき起こしている要因として、本書は、「希望の消滅」の他に、もうひとつの社会的要因、ランドルフ・ネッセのいう「苦勞免疫」の消失という要因も挙げています。ネッセが指摘しているのは、社会に出る前に、「小さな苦勞」を経験して苦勞に対する免疫を身につけると、社会に出てからも大きな苦勞に対して対処することができるということですが、本書で強調されているのは、そういう苦勞免疫力の育成をめぐる「社会化」のメカニズムが、現代の日本社会には失われているという点です。

著者によれば、近年の学校教育は、「ゆとり教育」とか「受験戦争悪者論」とか「競争自体がよくない」という形で、免疫になる苦勞を否定し、免疫力のつかない無駄な苦勞（画一的な規則に従う、いじめに反抗しない、など）だけをさせる傾向が強まっています。学校だけでなく家庭でも、つらいことはよくないこと、子どもに楽をさせることが親の愛情だと考える傾向があるため、このような親元や学校で育った青少年は苦勞に対する免疫をもつことができなくなっています。

こうして、苦勞免疫力を身につけないまま社会に出ることになった若者はどうなるのかといえ、多少の困難に出会うと、苦勞に耐えられなかったり、苦勞に直面するのを避けようとする人が多く出てくるということになります。更に、正社員としての職業役割を担うことや、結婚し子どもを育てる生活を送ることが楽しいことばかりではなく、苦勞を伴うものだと分かれると、とりあえず社会に出ることを先延ばしし、選択に伴うリスク

から逃避しようとする人も出てきます。こうして、いわゆるパラサイト・シングル（学卒後も親に基本的な生活を依存してリッチな生活を送る未婚者）やアルバイトで暮らすフリーターが急増することになるわけです。

現在の生活と将来の理想的な生活との間に決定的な断絶がある彼等は、現実の状況を忘れるために、実現の難しい「夢」を見続けますが、しかし、そのようにしてリスクを先送りしても問題が解決されるわけではなく、むしろ、リスクの先送りを続けることによって、彼等はますます深刻なリスクに追い込まれ、日本社会全体のお荷物に転化する途を歩んでいる、と著者は危惧しています。

3 人間疎外論の課題

1) 『希望格差社会』の評価

これまで、山田昌弘氏の『希望格差社会』を取りあげて、論旨をフォローしてきましたが、それは、先にも述べたように、人間疎外論とは無関係なように見えるけれども、その実質に注目すれば、現代日本社会の人間疎外状況の一定の側面を解明した最新の優れた業績であると評価できる内容を備えているからです。

ここで、「人間疎外論とは無関係なように見える」とはどういうことかといえますと、この本は、1990年代以降の日本社会における生活の不安定化現象の解明を中心課題とするもので、その分析や説明には、人間疎外、疎外の概念は見あたりませんし、人間疎外論の視点や発想との関わりについて著者が言及している箇所も見あたりません。ですから、人間疎外論とは無関係の文献のように映るわけです。

しかし、生活不安定化の現象を分析し説明するために、山田昌弘氏が依拠し、参照している欧米の研究者の文献に目を向けると、違った面が浮か

んできます。この書物の論理的骨格を支えているそれら欧米の文献とは、マックス・ウェーバー、ハンナ・アーレント、ピーター・ドラッカー、ダニエル・ベル、ジャン・ボードリヤール、ピエール・ブルデュー、アンソニー・ギデンズ、ウルリッヒ・ベックなどの著作ですが、私などからみると懐かしい名前が多い、これらの学者・思想家の考えは、いずれも人間疎外論と無関係とはいえないからです。

とはいっても、疎外概念の訓詁学的もしくはイデオロギー的な解釈に終始するような狭い意味での疎外論史には関係ないかもしれません。しかし、人間疎外論の生ける発想を時代診断に活用するという広い意味での疎外論の学説思想史には、これらの人たちの考えはいずれも登場し、かなり重要な意義を担っているものも少なくありません。その面に着目すれば、本書が人間疎外研究として評価される内容を含むのは、ある意味で当然のことといつてよいでしょう。

さて、次には、過去の人間疎外論の代表的な文献を取りあげ、そこにおける人間疎外の分析と本書の分析を較べてみたいと思います。人間疎外論の代表に選んだのは、古典的文献の一つである初期マルクスの『経済学・哲学草稿』です。これは、若いマルクスがパリに滞在して経済学の勉強に打ち込んだときの研究成果をまとめたものですが、その第1草稿にある「疎外された労働」の分析と考察は、あまりにも有名なもので、ご存知の方もおられると思います。これを選んだ理由は、山田昌弘氏の書物も「職業生活の不安定化」という「労働の病理」を分析・考察の中心にすえているので、比較しやすいだろうと考えたからです。

『経済学・哲学草稿』の第1草稿[4][疎外された労働]では、資本主義社会における労働、仕事の疎外された側面が、4つの形態に分けて捉えられています。①「労働生産物からの労働者の疎

外」、②「労働そのものからの労働者の疎外」、③「類的存在からの人間の疎外」、④「人間の人間からの疎外」、がそれぞれです。

第1の「労働生産物からの労働者の疎外」とは、自分が作ったものが自分の自由にならない事態のことです。本来の労働とは、芸術家の創作活動のように、作品に自己の全てを自由に表現し、それを享受できるものなのですが、そういうことができるのは一部の芸術家やプロフェッショナルだけで、工場労働者は、わずかばかりの賃金と引き換えに、労働生産物、つまり人間的な努力をつぎ込んだ活動の成果の大部分を持っていかれてしまうという事態を指しています。

第2の「労働そのものからの労働者の疎外」とは、労働のプロセスを通じて自己実現ができない事態のことです。本来の労働は、そのプロセスを通じて、自己の能力を発展させ、自己を豊かにし、人間的な成長が図られる活動のはずなのですが、そういうことができるのは一部の人たちだけで、毎日、単調労働に従事している大部分の労働者にとっては、単に肉体を消耗し、精神を退廃させるだけの、賃金のために我慢しているにすぎない退屈で苦痛な活動になっている事態です。

第3の「類的存在 (Gattungswesen) からの人間の疎外」は、解釈の余地を残す語句ですが、ここでは、社会的分業のなかでの類的なつながりが失われる事態と理解しておきます。類的存在としての人間の生産労働は、本来、「社会的結合のなかで自己を発現し、確証する活動」であるはずなのですが、生産労働からの疎外によって労働が個人的生存のための手段と化してしまうと、社会的つながりに支えられた自己発現や自己確証の働きも失われてしまうということです。

第4の「人間の人間からの疎外」とは、疎外された労働の背後に存在し、疎外された労働から読みとることのできる一定の人間の関係を指してい

ます。労働生産物が労働者自身に属さないで、疎遠な力として対立するときには、労働生産物は彼に疎遠で敵対的な他の人間、すなわち生産手段を所有する資本家に属しています。このように、疎外された労働は、労働者自身に与える影響を示すだけでなく、労働者が他者との間につくる疎遠な関係や敵対的な関係のような社会関係も表現しているということです。

このように、初期のマルクスは、「疎外された労働」を4つの側面に分けてとらえ、『草稿』以降の著作では、労働の領域における疎外が、他の生活諸領域の活動とどう関連し、また、労働者自身の意識や精神の働きにどのような影響を及ぼしているのか、更に、基底的な社会経済構造である19世紀の産業資本主義とどのように関連しているのか、を追求しています。

『希望格差社会』の分析と較べると、両者の分析の視点には、驚くほどの共通性、類似性があることに気づきます。①「労働生産物からの労働者の疎外」の説明は、労働力の二極化の説明に登場する、一握りの高収入のカリスマ美容師や有名ソムリエと、その裏に控える膨大な数の低収入下働き美容師や資格はあるが仕事のないソムリエの例を思い浮かべさせます。②「労働そのものからの労働者の疎外」の説明は、学歴に見合わない職について苦勞するくらいなら、理想的な職につけるまでアルバイトをしていた方がましというフリーターの意識についての説明に繋がります。③「類的存在からの人間の疎外」の説明は、フリーターや契約社員など、企業や社会から「いてもいなくてもよい存在」と宣告された人びとが「自分は何者だろう」と自問するというアイデンティティ問題についての記述と重なっています。④「人間の人間からの疎外」の説明は、ニューエコノミーの時代には、中核的労働者と単純使い捨て労働者の間に大きな裂け目が出現し、データを一心不乱に

入力する派遣のキーバンチャーは、その仕事をいくら続けても、システム・エンジニアや調査分析者にはなれないという説明部分と繋がっています。

『希望格差社会』の理論的な説明枠組は、生活状況を職業活動との関連でとらえ、社会意識を生活状況から説明し、生活状況の変化とその背景との関連性については、部分的な状況要因との関連性より基底要因としての社会経済構造全体との関連性に着目するというものです。だから、この本は単なる実証的研究に止まらず、時代診断・時代批判の書になっているのですが、こうした特徴も、まさしく初期マルクスに始まる人間疎外論の特徴と共通しているところです。

もちろん、本書が分析・考察の対象としたニューエコノミー下の生活不安定化状況は、マルクスが批判的考察の対象とした19世紀の産業資本主義下の疎外現実とは異なっていますから、両者の認識結果が違ったものになるのは当然ですが、しかし、対象にアプローチするときの分析視点や説明枠組の特徴については、両者の間に共通するところが少なくありません。したがって、本書は、実質上、現代日本の疎外された労働、人間疎外状況を分析・考察した業績として評価できると考えるわけです。

2) 豊かさの病理

本書は、現代日本の疎外状況を分析した業績として評価できると述べましたが、では、人間疎外の研究としてこれで十分であるのかといえば、そうはいえません。データの解釈や事実の説明のような細かな次元の問題は、この際は問わないとしても、人間疎外論を研究してきた者からみると、分析視角の不十分な点がまだ残っていると思うからです。そこで、以下には、そのような問題点の中から、重要だと思われる2つの点を、これから

の研究課題として指摘しておきたいと思います。

第1の問題点は、「豊かさの病理」を捉える視点が欠けているという点です。

本書は、正社員になれない若者の不安定な生活状況や、将来にも希望を持たない若者の絶望感、そういった未来が閉ざされた「負け組」の不幸については、詳しく、また鋭く分析していますが、しかし、大企業に就職し、将来の見通しも悪くない少数派の「勝ち組」については、希望に充ちた生活を送っていて当然、といった感じが伝わってくる程度で、詳しい記述がありません。

過去の生活に関しても、「戦後から高度成長期を経てバブル期直前までの日本社会は、ほとんどの人にとって、希望に満ち溢れた社会であった」という文章が物語っているように、過去の時代は、努力しさえすれば報われ、また、そのように信じてできた社会状況であったというだけの理由で、「努力が報われない」90年代以降とは対照的に、希望に満ち溢れた「黄金時代」として捉えられています。

しかし、こういう見方は、人間の経験をあまりにも単純化して捉えるものだと私には思われます。学歴、職業、家庭など、物質的・経済的生活の豊かさを約束する条件が、現在も将来も確保されるとすれば、それは、たしかに希望をもって生活するための1つの必要条件かもしれませんが、しかし、忘れてならないのは、それは希望のある生活のための十分条件ではないということです。物質的・経済的な豊かさには恵まれているのに、希望に満ち溢れた生活を送っていないという人は、けっして珍しい存在ではないのです。

マルクスの人間疎外論のテーマは、貧しさ、窮乏化の非人間的状況の把握にあり、その限りで、本書の分析とも通じるところがありますが、第二次大戦後に再発見・再認識された人間疎外論においては、「豊かさの病理」の把握が重要テーマと

なっています。「豊かさの病理」研究の先進国はもちろんアメリカですが、日本においても、高度経済成長期の後半から研究が盛んになりました。慧眼な著者がこの研究動向に気づかない筈はないと思うのですが、なぜか、本書には、この方面への目配りが欠落しています。

「豊かな社会の病理」とは、具体的にどのようなものなのか。ここでは、話を分かりやすくするために、文芸作品を材料にして、説明することにします。取りあげるのは、山田太一氏の作品です。同じ山田姓ですが、こちらの方は、社会学者の山田昌弘氏ではなく、シナリオ作家・小説家として著名な山田太一氏です。

山田太一氏は、1970年代～80年代に、いろいろなホームドラマを発表しました。「それぞれの秋」「岸辺のアルバム」「沿線地図」「早春スケッチブック」「夕暮れて」などです。テレビで放映されて、一躍注目を集め、衝撃を与えた作品が多いので、ご覧になっている方がたくさんいると思います。

テレビの夕方のホームドラマの舞台となる家族は、山田作品が登場するまでは、「肝っ玉かあさん」や「時間ですよ」のような自営業の大家族が多く、下町的な母親を中心とする心暖まる陽気な物語でした。ところが、山田作品が茶の間の視聴者に提供したのは、ほのぼのとした幸せな家庭ではなく、主婦が浮気をする、夫の権威が失墜する、子供が叛乱する、等々の問題をいっぱい含んだ中年サラリーマン家庭の不安定な生活世界でした。

山田ドラマの舞台は、東京近郊に住む都市中産階級のマイホームです。父親は都心の大企業に勤める40代半ばの中間管理職で、「それぞれの秋」の小林桂樹、「岸辺のアルバム」の杉浦直樹、「沿線地図」の児玉清、「早春スケッチブック」の河原崎長一郎が、体力、気力が衰え出した中年サラ

リーマンを演じています。

社会学者の山田氏流に見れば、職業も収入も家族も将来の見通しも、一応安定していて、特に問題があるようには見えないのですが、山田ドラマの世界では、彼等は、会社人間、モーレツ社員として、充実感や生きがいなどを感じる余裕もなく、仕事に追われ、せつかくマイホームを作ったものの、仕事一途で生きてきたために、家庭の中では父親の役割をうまく演じられません。その上、ときには、会社の上司から女性問題の処理を頼まれたものの、話がこじれて浮気のツケを引き受ける羽目になったり、解剖用の死体を密かに輸入、販売する業務をしていたのが息子にバレて、家庭騒動になったり、などのトラブルにも見舞われる日々を送っています。

夫だけでなく妻も、マイホームになじめず、家庭の空虚感、孤独感に苦しめられて、暮らしています。毎日、子供の世話をし、夫を会社に送り出すが、子供も夫も、自分のことなど留守番の犬か、お手伝いさんぐらいにしか思っていない。そうやって食事の世話、洗濯などに没頭していると、いつか自分の若さが消えていることに気づきます。

こういう生活パターンを繰り返しているうちに、「それぞれの秋」の久我美子は、子どもに対して、「お母さんにだって気ばらしも楽しみも必要なよ」と叫び、「夕暮れて」の岸恵子は、「私にも遊ぶ権利があるわ」と宣言し、そして「岸辺のアルバム」の八千草薫は、不倫に走るようになります。家族の関係は、表面的には平和に見えるけれども、裏ではバラバラで、乾き切っていて、決してそこに幸せとか充足とか希望を見出して生きているわけではないのです。

勤め先や、マイホームなど、豊かさの条件をどんなにそろえても、それだけで、日々の生活の味が、豊かで充実したものに変わったり、希望に

溢れたものになるわけではない。山田太一氏が作品を通して語っているのは、そして、多くの視聴者が共鳴したのは、この点にあると私は理解しています。

「豊かさの病理」を捉えることは、過去の認識に必要なからという理由からだけではありません。現代社会は、「成長型社会」から「成熟型社会」への転換が避けられない時代を迎えています。豊かさの条件さえ得られれば、という過去の考えからの脱却が求められており、新しい豊かさの質、生き方の転換を求める動きが始まっています。こういう、これからの成熟社会を占う上でも、「豊かさの病理」の追求は必要であると考えます。

3) 絶望と希望の弁証法

さて、もうひとつの問題点に移ります。山田昌弘氏の『希望格差社会』の表紙には、「負け組」の絶望感が日本を引き裂くという、いささかどきつい副題が付いていますが、この副題が物語っているように、山田氏は、現状とそれに続く近未来を、非常に暗い、ペシミスティックなトーンで描いています。読み物としてのインパクトは、たぶんそう書く方が強いのでしょうか、現状認識としては、そのペシミスティックな視点には問題があると私は考えます。

人間疎外論には、19世紀以降の永い展開史を通じて、その生ける部分として存続し、培われてきた基本的な視角がありますが、その1つに、現実の人間を、つねに非人間化とそれに抗する人間的な努力との拮抗のただ中にある存在としてとらえるという見方があります。この見方からすると、そういう個々人の力の積分された総体としての人間の社会も、歴史的発展の力を内包しない「絶望一色の社会」などにはなりようがなく、社会体制を介して差し戻されてくる非人間的な力

と、その構造的条件を変革しようとする人びとの力とがつねに拮抗している過程、そういう動的な過程として捉えられます。

人間疎外論は、社会の非人間的な病理現象を明らかにする理論であるという誤解がありますが、正しくは、非人間的な病理としての疎外態を、それに抗する主体的な人間的努力との動的連関において把えることを課題としています。そして、そのような見方からすると、本書の分析に欠落している面が見えてきます。それは、著者が若者の生活不安定化状況を生み出した原因と考える社会経済構造の変化から、じつは、絶望的状况だけではなく、若者の希望を育む状況も生み出されているという点です。

ここで、私の念頭にあるのは、ボランティアやNPOなどの市民活動のことで、今年、阪神淡路大震災から10年になりますが、あの震災のとき、全国からたくさんの若者が集まり、彼等のボランティア活動が震災復興に大きな役割を果たしたことは、覚えている方が多いと思います。

ボランティア活動は、いうまでもなく、慈善活動や義務的な奉仕活動と同じものではありません。たしかに、無償で、世のため人のために尽くす活動が多く含まれてはいますが、しかし、それは、自分がしたいと思ったから、自分の意志で、自主的・自発的に参加した活動です。嫌ならいつでも止められるのに、止めないで続くのは、活動によって充足感・満足感が得られ、仲間が得られるからであり、交流を深めたり、自分を豊かにできるからです。そういう点では、他人のためだけでなく、自分のための活動でもあり、「希望を育む」活動といえるわけです。

震災のときは、延べ100万人を超すボランティアが活躍し、あの年をボランティア元年と名付ける人もいるように、あのとき以来、ボランティア活動への関心が全国的に高まり、更に最近、ボ

ランティア活動と共通性のあるNPOやコミュニティビジネスなどの活動も増えて、市民活動と総称されるこれら自主的でボランタリーな集合行動が、たとえば地域社会の諸問題の解決にとって、欠かせない重要な活動となりつつあり、一部少数者の気まぐれな活動にすぎない、と片づけられる類のものではなくなってきました。

この市民活動の台頭は、若者の生活不安定化の増大と基本的に共通の根から生じています。若者の生活不安定化の背景にあるのは、ニューエコノミーの下での企業競争の激化による雇用の二極化ですが、それは、市民活動の台頭の背景にある、構造改革、規制緩和による社会的サービス供給システムの転換と共通の社会経済構造全体の変化から生じたものです。この社会的サービス供給システムの転換の結果、生活上のニーズを充足するためには、市民自らが自助努力でカバーしなければならなくなり、それが市民活動を盛んにした基本的な理由であるわけです。

台頭した市民活動は、地域問題解決の不可欠の資源になり、企業や行政と並ぶ第3のセクターとして、次第に重要な役割を期待される存在へと成長してきています。したがって、こうした現代日本の状況の的確な把握のためには、絶望への趨勢だけではなく、市民活動のような希望の拡大に繋がる事象にも目を向けることが必要になると思うわけです。

以上、山田昌弘氏の『希望格差社会』における若者の不安定な生活状況の分析・考察を、現代日本の人間疎外状況の優れた研究として紹介した上で、山田氏の著作では取りあげられていない2つの点、豊かな社会の病理の研究と、市民活動のような希望の拡大に繋がる事象の研究を、現代の人間疎外論にとって必要な課題として挙げました。

先にも述べたように、大学勤務の間は、役割上

の制約から、人間疎外論の研究に十分な時間を振り向けられない時期が、しばらく続きましたが、定年退職後は、制約からは解放されますし、時間的余裕もできると思いますので、再び若い頃の気持ちに戻って、この課題に取り組んでみたいと思っております。

そのような今後の抱負を申し上げて、私のつたない最終講義を終わらせていただきます。ご静聴、ありがとうございました。

日時：2005年2月19日 15:00～16:30

場所：明德館 1番教室 (M1)